

幼児の遊びと性について



樋口三紀子

ひまわりの花が咲き、真夏の太陽がじりじりと照りつける頃になると、所内の女の子達は涼しい木影を求めて遊び、男の子達は暑さかまわずセミの声にとびだし、トンボを追ひ、チョウを追ひ、クモ・アリと日やけた顔に汗をにじませて虫とりに夢中になる。いかに小さくとも男はやはり男、女はやはり女だといくづく考えさせられるのである。

私の勤める保育所は広島市の西部にある。私が初めてここを訪れた時は、四方が広々とした蓮池であった。一面緑に包まれ静かな環境の中に、トンボ・チョウが群れをなして飛びかい、市内にもこんな所があったとおどろくほどであった。そしてここに子ども達と生活出来ることが何よりも嬉しく思った。それから三年間蓮池はだんだん埋めたてされてゆき、アパートが建ち、この頃では視界がすっ

かり狭くなってしまった。そのため以前のような美しい状況は見られなくなったが、それでも園庭に作った小さな花畑にはいろいろな虫が集まり子ども達の欲求をどうにか満してくれている。

一、幼児の遊びと性

この保育所に来る子ども達の両親は会社・工場に勤めるもの、商業を営むもの、失対労務者などでたいてい朝早く出勤するから彼らが登園するのは七時四十分頃である。近所の友達・兄弟など三〜四人のグループで登園するもの、或いは母親に連れられてくるものなどがある。門を入って最初に言う「お早よう」の元気な声に彼らの健康を確めることができる。それから夕方五時半それぞれの仕事を終

えた母親の手に子ども達を帰すまで、彼らの保育所内での生活は長い。その長い生活の内容は殆んどが遊びで占められている。幼児を理解するにはまずその遊びの実態を知らねばならないと思う。正しい遊びの指導ができるならそれは即生活全体の指導ともなるのではないだろうか、それは現在保育者としての私の夢であり同時に大きな悩みでもある。この悩みを解決し夢の一部でも実現させるために、私は幼児の自然な遊びを観察しはじめた。

自由時間における幼児の遊びを観察しているうちに興味ある事実の数々を知ることができた。すなわち幼児の殆んどは集団をなして遊んでおり、特に男児は男児同志、女児は女児同志が数人ずつ集まって同性集団を形成している場合がかなり目立っていた。男女共同生活の場であるべきはずの保育所内の現象だけに、私は非常に不思議に思い幾度もいくどもくり返し観察したがやはり同じ傾向がみられた。私達の保育所ばかりかと思ひ二、三他の保育所を見てまわったが、やはり男女別の集団をつくり遊んでいる傾向が目立っていた。そこで男児と女児についてそれぞれ遊びの好みの度合を調査してみると、一般に男児は虫とり・すもも・ベースボール・ハンドカーなどの遊びを好み、女児はブランコ・ジャングル・ままごとといったような遊びを好む傾向があり、遊びの好みに明瞭な性的相違のあることが明らかになった。したがって保育所内で男女が別々の集団をつくり性的分離の現象の生ずることは、遊びに対する好みの性的

相違にもとづくものとも考えることができる。もしそうだとすれば、男女児ともに遊びに対する好みの相違からそれぞれの遊びを十分に堪能できるはずである。しかし実際にはそうでない場合がしばしば見うけられる。

二、性と力

男女それぞれ好む遊びをしてもやがて男児がこの遊びに飽きてくると女児の遊んでいる遊具に侵入、女児を追いだしてしまふことがしばしばある。また珍らしい遊具を与えたとまず男児が占有する。女児はその遊具を早く使いたくて保育に訴えるが、放任しておくと殆んどの場合男児が飽くのを待たねばならない。一般に男児集団は女児集団よりも力関係において優位にみえる。すなわち男児と女児が好みの度合においてやや共通しているような遊びにおいてみられる性的分離の現象は、男児集団と女児集団との間に生ずる相互の力関係によって決定されたわけである。したがって、男児集団は力の強い幼児の集まりであり、女児集団は力の弱いものの集まりであるというように、性的関係を力関係におきかえて考えてみることもできる。

乳幼児の平均身長・体重をみると、生まれた時からすでに男児と女児では差があり、六才まで殆んど同じ程度の開きがあり男児が女

児よりも体力的に優位であるのが普通である。また握力や、ボール投げ・走る跳ぶなどの運動能力その他いろいろな面でも男児が女児よりも優位であり、男児が体力的に女児にまさっていることは否定することのできない事実である。したがって保育所内でみられる性的分離の現象を力の優劣関係によって説明することが可能のようにも思える。事実、ある研究会の席上で聞くことのできた保母さん達の意見も殆んどそれで、性的相違を力の相違によって説明できるかのようであった。すなわち遊びに対する好みの度合が性によって異なることも窮極において、力関係に由来するもので、男児が好み女児が好まない遊びも男児の干渉によって女児が遊べなくなり、いつのまにか好まぬ遊びに変形していったというように説明できるのではあるまいか。

しかし更に幼児の観察を続けていると、性的分離の現象が力関係のみで説明することのできない場合もしばしば見いだすことができた。

三、遊びに対する好みの性的相違

ままごと・オルガン遊びなどにおいては常に女児が優位であり、男児が近づいてもそれらの遊びの場を占有するようなことは殆んどない。ジャングル遊びにおいては男児よりも女児が圧倒的に興味を

もち、女児のジャングル遊びに男児が交ってもすぐに去って行く。これらの性的分離の現象は好みの性的相違にもとづくものであり、力関係のみによって説明することのできないものである。したがって所内の遊びにみられる幼児の性的分離の現象は遊びに対する好みの性的相違及び男女の力の相違によって或る程度説明できうるものと考えられる。

幼児の描く絵を見ると、男の子はヘリコプター・舟・自動車などを多く描き、女の子は人形・家・花などを好んで描くようにみえる。このような現象は遊びに対する好みの性的相違と同様に、性にもとづくものが画面に表現されたものと思われる。

四、性差と生活環境

前記性的相違について考えられることは、第一に先天的な性差である。男女によって染色体が異なっているように、男児・女児とも生まれながらにして本質的相違の生じていることが考えられる。

第二には後天的性差で、幼児に対して施す親の教育或いは彼らの生活環境の影響によって生ずる性的相違も考慮する必要があると思ふ。

先天的な性差の表われとして体力の相違などをあげることができようと思う。しかし運動能力などは多分に後天的なものではな

ろうか。体力差以外による先天的性差として表現されるものが種々あると思われるが、私はまだそのようなデータにめぐりあえない。幼児の性的相違について後天的に重要な影響力をもつものとして考えられるものに生活環境がある。彼らがどのような環境において育てられるかによって彼らの性格は著しく変化するものと考えられる。我が国においては古くから男性の労働によって家庭経済をささえ、女性には家にあって家庭を守って行く風習がある。一般に、社会が男児にはいわゆる男らしさを、女児にはいわゆる女らしさを要求する空気の強いのはこういった歴史的背景による社会的要求の表われではなからうか。幼児をとりまく人々は常に幼児に対してこれらの社会的要求に添うような形において要求し期待している。

一般の家庭においても、親が子どもに要求しているものの中にはこういった社会的要求に応じたいわゆる女らしさ男らしさということが大きな場を占めているように思える。

私は時々父兄からこんな相談を受けることがある。「ピアノを習わせよとすすめられるが男の子だからどうしようかと思う」「お行儀が悪いが男の子だから仕方がない」「女のくせにお行儀が悪い」といったような女の子だから、男の子だからということばをしばしばきく。しかしこれらのことはあくまでも一般的なものであり、このような性差を助長するような親の要求と期待の程度は家庭によって多少のずれがあるようである。即ち更に一層幼児を細かく観察し

てみると、両親の仕事の種類、異なる家庭の子どもはその行動において著しい性的相違を見出すことができるが、両親の仕事の種類に類似している家庭の子どもにおいてはさほど性差はみられない。これらの現象は、幼児の家庭における生活環境が彼らの性格に重要な影響力をもつことを示すものであろう。したがって性差を助長させる一つの要因としては特定の社会構造或いは家庭構造などの基盤の上に必然的に生ずる役割期待をあげることができると思う。それは幼児の性格形成にかなりの影響を与え、その結果行動面において著しい男女差が生ずるのではあるまいか。このように幼児をとりまく生活環境は種々なる形において彼らの性格に影響をあたえているが、我が国におけるこれらの影響性は一般に性差を助長させるような方向性を辿っているかのように思える。

五、保育と性差

保育所内における生活環境もまた幼児にとってかなり重要なものである。保育所内においては一般に女児よりも男児が優位であるのが普通であるが、ある保育所においては男児よりも女児の方がより優位である。この保育所は音楽リズム中心の保育がなされている。そのためか行動・発表力などにおいて女児が優位に立つ場合が多く他の保育所にみられ難い現象を示すようである。この事実は保育所

ければならない。これは容易ならぬことである。ここまで考えてきた時、保母がいかに高い教養を必要とするかを痛感するのである。

む す び

前記のように保育所内でみられる遊びには性的分離の現象がみられたが、こういった現象の生ずるのは先天的な性的相違が彼らの生活環境の影響によって更に助長されてきた結果にもとづくものと考えられる。

したがって遊びにみられる性差は、親或いは保母の指導方針いからんによって、また社会的要求の変遷にともなうて変化しうるものであり、決して固定したものとは考えられない。

保育にたずさわるものの一挙一動が、幼児の性格形成にいかに重要な影響を与えているかを認識するとき、私は自分の職責の重大さを痛感し、更に深く幼児を理解するために努力しなければならないと思うのである。

——一九六〇年七月三十日記——

(やわらぎ学園保育所)

における保育者の指導性が彼らの性格形成に重要な役割を演じていることを示すものである。所外において培われた性格が所内の指導方針によって変えられることは保育者として特に注意を要することと思う。ある特定の指導方針をもたない保育所においては、家庭内において培われた性格が、そのまま所内においても表現され、男女差は遊びにおける性的分離の現象のように明瞭な形となって表現されるのである。我々保育にたずさわるものは、こういった男女差を保育の面においてどのように扱うべきかを真剣に考える必要があると思う。一般家庭において考えているような役割期待をそのままとり入れるか、或いは特殊教育によって彼らの性格を変えてゆくか、いずれにせよ、きわめて重要な問題である。無定見な保母の指導性は彼らの前途に大きな障害をかもした結果ともなりかねない。最も無難な指導性としては社会の要求を満たすにたたる男児に育て、女児を育てるといった方向性をたどるべきだと思う。しかし彼らが成人になった時の社会構造を考えてみた場合、我々が漠然と受ける社会的要求をそのまま我々の指導性に取り入れるべきかどうかについては多くの疑義があるように思う。我々は彼らの成長過程において、また彼らが成人になった場合において、我々の教育がより効果的に価値を生みだすようにするためには、指導の方向性を十分に検討を加える必要があると思う。そのため、我々は先ずは、彼らに対する数々の社会的要求の中から最も正しいと思われるものを求めな

★ ★ ★ ★